

「子ども大学」 川越で成果 さらに6カ所開校へ



講師の問い掛けに元気よく手を挙げる子ども大学かわごえの子どもたち = 川越市の東京国際大学講堂

「飛行機はなぜ飛べるの」「さびた鉄剣がどうして国宝なの」。子どもたちのこんな疑問に大学教授らが答える「子ども大学」が10月から、県内6カ所で開校する。地域の大学やNPO、市町村・県教委などが連携して立ち上げる新しい形の学びやだ。小学生を対象に学校では教え切れない知的好奇心を刺激し、学ぶ楽しさを引き出すのが狙い。そのモデルとなっているのが川越市内の3大学と住民らで立ち上げたNPO法人「子ども大学かわごえ」(理事長・江夏健一早大名誉教授)だ。口コミで「面白さ」が広がり、3年目の本年度は

募集定員100人を上回る172人の児童が学んでいる。

10兆円は何キロ？

「税金の種類について知ってる人」。講師の問い掛けに大学講堂に集まる児童たちから一斉に手が挙がり、そのうちの一人が「消費税」と答えると「よく知ってるな。みんなが一番身近な消費税は毎年10兆円前後。10兆円分の一万円札を重ねるとどのくらいの距離になると思う」と講師。

「100メートル」「3キロぐらいかな」。再び元気な声が飛ぶ。「100キロにもなるんだ」という答えに「すげ〜」と子どもたち。後方で傍聴する保護者からも「そんなになるの」と驚きの声が漏れる。取っつきにくい税の使い道が、こんな調子で説明されていく。

9月下旬、東京国際大で行われた子ども大学かわごえの授業風景。講師役の**税理士飯島賢二さん(県納税貯蓄組合連合会会長)**による「税金のお話」に子どもたちはメモを取るなどして聞き入った。

学びの源「好奇心」喚起

子ども大学の設立は元商社マンで早大産業経営研究所の特別研究員を務める酒井一郎さん(74) = 川越市在住 = が、ドイツで先駆的に行われていた子ども大学に感銘を受けたのがきっかけ。

「今の学校教育の現場は基礎を幅広く教えているが、専門的なテーマを深く教え切れない。子どもの知性は10歳前後から発達し、その時期に好奇心や創造力を育てることが大切」と酒井さん。

国内初となる同大学設立を思い立ち、川越市内の東京国際大と東洋大、尚美学園大の教授陣に相談。地域住民や教育、企業関係者もこの「市民立大学」の設立に賛同し、2008年12月、運営母体のNPO法人を発足させた。

同市と鶴ヶ島市、川島町の小学4～6年生を対象に休日を使って開催。3大学の校舎などで森羅万象のさまざまな「なぜ」に迫る独自の授業を開いている。

大学教授や企業関係者による工作、異文化交流授業などのほか、これまでに元NHKキャスターの池上彰さんや川島町在住の俳優竹本孝之さん、川越氷川神社宮司の山田禎久さんらが講師を担当。3期生が学ぶ本年度は6月から来年3月までの8日間（1日45分授業を2コマ）の日程で開き、入学費用は年5千円だ。

個性伸ばす“自然教育”

昨年度に続き授業を受ける川越市の野村亮輔君（5年生）は「いろんな先生がいて初めて知ることが多くて楽しい。学校で教えてくれない実験や（政治・経済問題など）今動いていることを分かりやすく教えてくれる」と話す。

保護者の反応はどうか。さいたま市南区から「口コミ」をきっかけに4年生の女儿が参加している主婦（44）は「学校や塾だけでない『外』でいろんなことを吸収してほしかった。聞いていて私も勉強になるし、家に帰って娘との会話も進む」とにっこり。5年生女儿が学ぶ川越市の公務員男性（54）は「授業に子どもたちを参加させるという工夫がある。マニュアル通りでないところがいい」と個性を伸ばす型破りの“自然教育”に満足そうだった。

出典：埼玉新聞 2010年10月1日（金）

<http://www.saitama-np.co.jp/news10/01/02.html>